

日本医学会分科会活動報告

一般社団法人日本血液学会
理事長 松村 到

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

血液学は、血液成分たる各種血球・血漿蛋白を研究対象とし、基礎医学的には細胞内のシグナル伝達・転写・代謝制御、及び、生体の免疫・止血/血栓系の両面に広く関わり、臨床医学的には血液疾患の予防予測と治療開発を主たる研究領域として、現在内科学の一翼を担うに至っている。近年の生命科学と科学技術の進歩、特にゲノム解析技術の進歩を基盤として、臨床血液学は目覚ましい進歩を遂げている。このため、血液内科医は日常診療において、正確な診断、病態理解のために、従来の形態学のみならず細胞遺伝学、分子生物学などの幅広い基礎知識を要求され、また、治療の分野においても、分子標的療法・免疫療法などの最先端の新規治療を熟知し、適切な治療法を選択する必要がある。こうした新しい時代に対応すべく、血液学会は、研究支援、人材育成、最新情報の発信に努めている。

① 造血器腫瘍診療のガイドライン

造血器腫瘍診療の「均てん化」と「標準的治療」の促進という社会的要求に応えるために、学会の作成委員会が執筆を担当している。現在は第2版補訂版がWEB上で公開されている。本ガイドラインはMindsに準拠しており、臨床研究の結果から得られたエビデンスを基に、疾患の治療アルゴリズムやクリニカルクエスト(CQ)に対する解説が記載されている。最近の治療の進歩に関する情報を日常臨床に届けることを意図しているが、今後新規分子標的薬(ベネトクラクス)、二重特異性抗体(ブリナツモマブ)やCAR-T細胞療法の記載が追加される予定である。

② 造血器腫瘍ゲノム検査ガイドライン

がんの網羅的遺伝子検査(いわゆる「がん遺伝子パネル検査」)は、近年のゲノムシーケンシング技術の飛躍的な進歩を背景に、がん臨床に不可欠な検査となりつつある。固形癌に比べて血液腫瘍性疾患への遺伝子パネル検査は臨床実装が遅れているが、血液学会ではこれに先立ち「造血器腫瘍ゲノム検査ガイドライン」をWEB公開している。本ガイドラインでは、臨床的に有用性の高い遺伝子異常を、現時点でのエビデンスに基づいて抽出するとともに、パネル検査を含めた各種遺伝子検査の特徴や基本的な考え方を記載している。将来の「がん

遺伝子パネル検査」の保険診療への導入を見据えたガイドラインとなっている。

③ 疾患登録と臨床研究

現在学会主導で、「血液疾患症例登録」、「新 Target」、「MM 事業」、「MPN 事業 (JSH-MPN-15)」、「MPN 事業 (JSH-MPN-R18)」、「J-SKI 事業 (JSH-J-SKI)」、「COVID-19 事業 (JSH-COVID19-20)」等の疾患登録と臨床研究が走っている。

b. 当該領域における国際的な役割

本学会では 10 年以上前より、学術集会総会においてアメリカ血液学会 (ASH)・ヨーロッパ血液学会(EHA)との共同企画の講演やシンポジウムを行い、交流を深めて来た。また、アジア各国との合同シンポジウムも毎年企画されており、アジアの代表としての役割を担っている。さらに、EHA Congress Travel Award、EHA-JSH Collaborative Exchange Program、ASH-JSH Abstract Achievement Award を設けており、若手研究者の国際交流を支援している。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

近年の網羅的な解析技術や薬剤開発などが急速に血液分野を変革しており、本学会の教育・診療・研究の役割が大きくなっている。また、患者会との交流を深め、毎年の学術集会において公開シンポジウムを企画している。患者を支援し、血液学の進歩を適切に還元することが重要な社会的意義と考える。

d. 学会運営上留意している点

本学会は、血液学の基礎領域から臨床領域まで幅広く学術貢献活動を行っている。よって、研究者、臨床医、製薬企業並びに関連団体や行政との連携が必要となり、また、患者会との協力もかかせない。血液学の教育・診療・研究の充実を目指すべく、情報の収集や発信をタイムリーに行うことが求められ、学会の約 30 の委員会が活発な活動を行っている。学会の運営においては、多様な役割を持つ領域における会員のニーズに応えるべく、多様性を重視した運営に心掛けている。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

日本内科学会に加盟する血液領域の学会とは、様々な側面で協力・連携している。

日本小児血液・がん学会とは、血液疾患における成人と小児・AYA 世代における連続性を学

術的に検討しており、また、学会のすべての委員会に小児科医の参画を求めている。

また、日本血栓止血学会・日本造血・免疫細胞療法学会、日本輸血・細胞治療学会、日本臨床細胞学会、日本臨床腫瘍学会、日本リンパ網内系学会とは、未承認薬・適応外薬の要望を密接な協力の元で行っている。日本医学会分科会加盟学会は、社会的側面を保有していることから、連携することで厚生労働省等への要望をいち早く患者の利益に還元することができる。